〔概　要　書〕

平安時代中期までの和文における笑い

―『源氏物語』を中心に―

金　小　英

笑いは人間にとっての普遍的な現象であり、多様な人間関係によって構成される社会においては、批判・共感・排除・活力・包容などさまざまな機能をもつということはひとまず認められるだろう。人間（性）をあつかう文学に現れる笑いも、このような性質と無縁ではないはずで、それについて検討することは、テクストの中を生きる個を理解するだけでなく、その時代の価値を読み解く上で重要な手がかりにもなろう。そのような視座から、本論文は『源氏物語』を研究対象の中心としつつ、平安時代前期から中期までの和文における笑いについて、全三篇八章にわたって論じた。各章の方法および内容は次のようである。

第一篇　平安前期の和文における笑いの諸相

第一章　「笑い」論の展開と文学における笑いの領域　―特に平安前期の和文に照らして―

本章では、まず古代から現代まで蓄積されてきた膨大な「笑い」論における重要な論点を平安文学、特にその前期の和文に照らしつつ、「笑い」論の（ある程度の）体系的な理解を試みた。その上で、これまで曖昧にされたまま議論されてきた文学における笑いをとらえなおすために、読者の享受とテクストの方法の側面からその意味内容を確認し、文学における笑いの対象、領域を見定めようとした。

まず、西欧の「笑い」論の土台ともいうべきプラトン、アリストテレス、キケローなどの考察をはじめとして、そこから発展する代表的な理論、すなわち笑う側の優越する立場を説く「優越理論」、不一致あるいは矛盾に焦点をあてる「不調和理論」、心的エネルギーの発散や笑いのカタルシスの側面に重点をおく「解放理論」、また、共同体における笑いの機能に注目するベルクソンの論など、西欧における「笑い」論の大きな流れを時間軸にそってとらえてみた。

これら諸々の「笑い」論の考察をふまえても、完結した一概念として笑いを定義するこ

とはいよいよ困難になるばかりだろう。それゆえ、すべての笑いを包括する完全な概念としてではなく、ここでは読者の体験、それに個々のテクストを動かす内的原理という文学方法の側面から、文学における笑いの概念を提示してみた。それは、ひとつには微笑・哄笑・苦笑・冷笑・嘲笑・憫笑・嬌笑・失笑など様々な段階の笑いを包括する身体表現であること、また一方では笑う行為が表情・声に現れなくても、ある事柄に触れて「おもしろい」「おかしい」「喜劇的」「ユーモラス」「コミカル」などと感じる快（の認識）あるいは笑いたくなる心の働きを内包する意味内容であること、以上の二つに整理された。その上で、テクストのなかでは何が笑いの対象になるのかという問題、言い換えれば笑いの領域に関して、「滑稽」「諧謔」「機知」「諷刺」「皮肉・反語」「パロディ」などの範疇に分けられることを論じた。

第二章　『土佐日記』の方法としての笑い　―非日常空間における仮名日記の試み―

本章では、平安前期和文の散文群の中で、比較的諧謔性を全面に出している『土佐日記』の笑いの方法を第一章の成果をふまえ分析した。『土佐日記』の笑いに関する従来の論では、笑いの領域の曖昧さという問題に加え、各論者が表現の特色に注目する傾向もあったため、方法としての笑いの全体像は充分考察されてこなかった感がある。そうした問題意識から「方法」としての笑いという観点に基づき、（一）機智的言葉遊び、（二）揶揄・諷刺、（三）滑稽・諧謔に分けて、『土佐日記』の笑いの全体像を把握しようとした。

一つ目の「機智的言葉遊び」については、言葉の連想や概念の矛盾の喚起・対比からなる洒落をはじめ、和歌の縁語・掛詞的発想を生かした言語遊戯など、さまざまな言葉遊びが見られた。言葉自体に対する過剰なまでのこだわりは、一つの言葉が持つ表現方法の可能性をできるだけ書き込んでおこうとする、あるいは表現技巧の倉庫を作ろうとするような姿勢さえ窺えた。二つ目の「揶揄・諷刺」においては、言葉遊びの一特性である対比・対照を用い、知的・道徳的に優越する立場から相手を格下げしようとする方法が共通になされていた。都の常識・教養を共有しない鄙びた楫取・田舎歌人に対しては「都」対「鄙」意識から排他的な揶揄を使って卑俗化し、一方、同じ都人を批評する際には書き手の道徳性に基づき非難する諷刺の方法が採られていた。三つ目の「滑稽・諧謔」においては、滑稽が見立て・擬人化・誇張などをもって人や場面におかしみを与えたり、場合によっては恐怖や退屈を振り払う機能をするのに対して、諧謔は書き手側の人をえがく際に用いられ、人の弱点やしくじりを否定的にえがきながらも、人間的な共感を呼び起こすような包容す

る性質も察せられた。

『土佐日記』では、以上のように表現のおもしろみを開拓する機智的言葉遊びを基調に、書き手との関係性に応じて人々を揶揄・諷刺したり、また、おかしさを点描する滑稽・諧謔が形成されており、その笑いの幅も非常に広い。さらに、軽妙で俗っぽくすなおな散文ならではの表現は、仮名日記という形式、それに船旅という非日常空間における出来事という設定によって獲得された面もあるだろう。

第二篇　平安中期までの「人笑へ」言説

第三章　『竹取物語』における「人笑へ」言説　―『源氏物語』からの系譜学的考察―

本章では、『竹取物語』の、五人の貴公子の求婚譚の末尾を分析し、そこに恥意識を基調にした、一種の「人笑へ」に相当する言説が見られるということを論じた。ただし、それは『源氏物語』から抽出される「人笑へ」の特徴をもって逆照射した時、すなわち系譜学的に見た時、構造的に把握されうる仕組みであると考えられる。そこで、その考察のため、まず本章では、『竹取物語』の五人の求婚譚の最後の語りをそれぞれ検討し、第四章で『竹取物語』以降に書かれた諸作品の「人笑へ」の系譜をたどることとした。

五人の求婚譚のうち、第一・二話の最後の語りは他者の視線に基づいた恥意識に注目しており、第三・四話では、世間の反応・外聞の形成過程が扱われている。人の行動を「聞き」「見る」側の観察的でかつ価値判断的な視線が語られ、個人の行動を顧み恥じるべき反省の視点を要請しているのである。さらに第五話では、これらの思考を集約したかのように、他人の視線に基づいた恥意識が極端化され、それに浸蝕され死に至る過程が示される。

五つの物語に散りばめられている、（一）他人の視線を自分の行動に照らし恥じること、（二）「世の人」の作る噂とその働き、（三）内面に浸透する他者の視線と恥意識、といったものを、「人笑へ」という語を用いていない『竹取物語』の「人笑へ」言説と見なすことは、『源氏物語』の特質から逆照射しない限りありえない。その意味で『竹取物語』の五人の求婚譚の末尾の語りは、「人笑へ」の語が生成・定着する前に、それに相当する中身が物語化されている面において、その先駆性が認められよう。

第四章　平安中期までの「人笑へ」のありよう　―『竹取物語』以降から『源氏物語』まで―

本章は、『竹取物語』以降に書かれた和歌、日記文学、物語などに現われる「人笑へ」の

系譜をたどり、一つの行動原理として重みをもつようになる『源氏物語』の「人笑へ」の特徴をとらえることを目的とした。あわせて、第三章で提示した論を裏づけるための論である。

「人笑へ」という語の出現は、その抽象的な内容を概括する概念が生じたことを意味するだろうが、『源氏物語』以前の作品の例をたどってみると、他者の視線としての「人笑へ」と、その結果として受ける恥意識は予想されるものの、一つの倫理になっているほどの制御力までは持っていないようである。常に自分を対象化するような、集団化された他者の視線として、また、自らを評価する基準として働き、外部世界の暗黙的な期待に応じようとする強い内在律になるほど、その意味が拡大・深化するのは、『源氏物語』においてである。特に出家・死といった世間との没交渉を通じて「人笑へ」を回避しようとする宇治十帖の志向性は、『竹取物語』と軌を一つにしながらも、さらに深化・拡充された面が窺える。

こういった『源氏物語』の「人笑へ」の特徴から『竹取物語』の求婚譚を逆照射した時、「人笑へ」の原点というべき中身を『竹取物語』から見出すことができるのではないか。五人の求婚譚において破片のようにして埋め込まれていたそれぞれの最後の語りは、一貫した「人笑へ」言説行為として現われてくると思われる。また、一つの文学作品が先行する文芸をいかに吸収・変形し転移をなすのか、という観点から見れば、テクスト相互連関性が文学を吟味する上で重要な方法として浮かんでくる。その意味で『源氏物語』の「人笑へ」は、『竹取物語』の五人の求婚譚を貫く思考を一つの価値として認めその深層に敷き、あるいは血肉化し、深化・拡大させたとも言えるだろう。

第三篇　『源氏物語』の諧謔性と笑い

第五章　頭中将と光源氏 ―「雨夜の品定め」の寓意性―

本章は、「雨夜の品定め」における源氏と、その親友でありながら後に政敵にかわる頭中将に関する従来の議論を見直そうとする論である。その際、特に「絵合」と照らし合わせた考察を展開し、「雨夜の品定め」で私的・個人的な次元を超えなかった二人の女性観および倫理観というべきものが、後の政権争いにかかわる「絵合」で物質的な力、政治的な力へと変換することを物語の人物造形とからめて検証した。

「雨夜の品定め」に語られる頭中将と光源氏それぞれの、女性に関する発言・態度に注目すると、そこに投影されている二者の異なる理想の差を読みとることができる。世俗的な繁栄と公的な承認を重視する頭中将の発言からは現実主義的な面が如実に示され、これ

と対比する形で、吉祥天女のような理想の女・藤壺を求める源氏の姿勢からは、完全なもの、理想的なものへと上昇しようとする人間精神の基本的な欲求がかいま見られるのである。お互いの軽いひやかしとおかしみの中で露見される二人の異なる志向性は、遠く「絵合」の場で個人的あるいは私的な価値というべきものを、物質的な力、政治的な力へと変換させ、主導権の問題へと展開させる。

こうして両場面の持つ緊密な関係性を解読することにより、頭中将の人物像についても、従来のように澪標巻以降において必然的に変貌しているととらえるのではなく、「雨夜の品定め」での頭中将のありように照応していると解しうるだろう。また、両者の姫君への教育観にまで反映されていることも確認した。このように「雨夜の品定め」の女性論の寓意性は、少なくとも第一部の長編的展開を読み解く上での重要な視座を提供する総序として機能していると思われ、物語構想における綿密な意図を読みとることができる。

第六章　『源氏物語』における「女」と「仏」―若紫巻の喩としての「仏」を中心に―

本章では、若紫巻を中心に「仏」を喩として「女」に重ねる場面に注目した。仏教の思想・信仰のありようが問われるような文脈で「仏」を用いた場面、特に喩として「女」に重ねる場面について、先行する諸作品との比較のなかで『源氏物語』にどのような独自性があるのかを、特に表現面からとらえ、検討した。

『源氏物語』以前の説話集・日記文学・和歌・物語の中で、人を「仏」（仏像・菩薩を含む）になぞらえる例は、ほとんど男、それもすばらしくて尊さに満ちた法師に限られており、女に仏が重ねられるのはごくまれである。

『源氏物語』の場合、男と女両方に「仏」を用いる比喩表現が点在している。男の例は、源氏に用いられ先行作品と同様のあやをなしている。しかし一方では、男君が「女」を「仏」に重ねるという、同時代のほかの作品にはない、めずらしい現象が散見される。まず、源氏が発する、若紫巻の二例の「仏」は、藤壺への思いから発展した、執着とも言うべき源氏の欲望を象徴する喩として機能していると思われる。鬚黒と玉鬘、柏木と女三宮、薫と中の君の関係などでも、「仏」と女という異質なものを同じ水準であつかう個所があり、源氏の例と同じく各場面からは女君に対する男のつよい執着心・欲望が看取される。男君の抑えがたい、また認められない欲望を表現するにあたり、両立しがたい女と仏という二者を巧妙に変形して響かせていると考えられよう。ただし、それらの文脈から深刻さは感じられず、むしろ誇張および意外性による諧謔性さえ漂い、男を戯画化する傾向が見られる。

そこでは、仏の教えどころか、地獄の苦しみからも、倫理意識からも離れ、無意識的・無批判的に踏襲されてきた「仏」の観念は覆され、その権威が無化されるという効果をも示しているだろう。

第七章　玉鬘十帖の笑い　―端役から主要人物への拡がり―

本章では、中年の源氏の恋心をそそる玉鬘を軸に話が展開する玉鬘十帖の笑いを考察した。その際、主に玉鬘十帖の前半部に登場する豊後介と女房三条、乳母らがもつ笑いの要素に注目し、そこから派生する笑いが玉鬘とどういうふうにつながり、また連動・拡大するのかということを明らかにしようとした。

筑紫で二〇年近く過ごした玉鬘の世話と教育を担当し、大夫監の手から玉鬘を守った乳母一行の役割は、玉鬘が源氏に引き取られた時点で終わる。その直前で、かつての大夫監の特性が豊後介と三条にうけつがれたかのように、二人の身体の鄙性、それに三条の柔軟性に欠けた無知・頑固さが顕著となり、それが都人の右近の目を通して語られる。一方、乳母については「めのと」「おとど」から「老人」へと呼称が変化し、物語からの消滅が予告される。小品のように語られる豊後介と三条の、鄙性とその滑稽さの意義は、田舎育ちでありながらも人々に賞賛される玉鬘の美しさやすばらしさの後ろに潜む鄙性を象徴するものではなかろうか。

大夫監から豊後介と三条へと拡がる鄙性を伴った笑いは、玉鬘周辺の者たちのものだが、当の主人である玉鬘とも無縁ではなく、むしろ彼女の負性と「わららか」な性格とが合致して都の人々を笑わせつつもひきつける力となり、ついには帝にまで拡がったということではないか。玉鬘十帖を華やかに彩る玉鬘の魅力は生まれつきの美しさと人なつこい性格だけでなく、夕顔から受けついだ負性、それに筑紫での境遇にかかわる鄙性が一体化してあらわれ出たものであろう。

第八章　男女関係に用いられる「たはぶれ」の一考察
―一〇世紀から一一世紀の物語における色恋の生成―

本章では、和語である「たはぶれ」を注釈の問題とからめつつ考察した。さまざまな関連語・派生語をもつ「たはぶれ」は、文脈によっておおむね、（一）遊び興じること、（二）冗談、（三）本気でない男女の交わり、といった三つの意味に解されるが、その語が男女間に用いられる時、諸注釈書では（一）か（二）の義に解することが多く、（三）の意味合い

をくみ取る例は意外と少ないのである。そういった注釈の問題と関連づけ、特に物語の文脈に即して、「たはぶれ」の意味の特質をとらえようとした。

上代の諸文献を調べると、元来「冗談」「あそび」の意味合いしかなかった「たはぶれ」だが、「たはる」と「戯」の義を共有することによって、また、漢籍の訳・訓読の歴史が重なるにつれて、「冗談」「遊び」以外の語義が「たはぶれ」に加わった可能性が考えられた。すなわち、「たはる」の色恋に溺れる意の一部が「たはぶれ」に吸収されたのではないかと推し量られるのである。その根拠は、後の一〇世紀から一一世紀の諸作品、特に物語の中で、単に言葉だけの冗談やからかいにとどまらない、男女の色恋に関わる「たはぶれ」が散見されるからである。

物語におけるこのような傾向は『源氏物語』においてより顕著になり、その用例の半数以上が色恋にかかわる多様な「たはぶれ」を豊かに使い分けていることがわかった。男女の関係や状況に応じてその意味合いはさまざま変化するものの、男女の色めいた言行の性格は共通して含み持っていると思われる。

＊

以上のように本論文では、平安前期から平安中期までの仮名書きの散文作品群について、笑いを鍵語に色々な側面から焦点をあててみた。同時期に書かれた『うつほ物語』や『落窪物語』などの物語文学、また『蜻蛉日記』『枕草子』など諸作品も視野に入れて調べたものの、とりあげられなかった笑いも多く、今後は全体の検討を要する。同じ平安時代に書かれたといっても、形成される笑いの様相は相当に異なっており、それら全体を俯瞰することで平安文学の笑いをいっそう多角的に見ることができるだろう。